

余と万年筆

夏目漱石

青空文庫

此間ろあん魯庵君に会つた時、丸善の店で一日に万年筆が何本位売れるだろうと尋ねたら、魯庵君は多い時は百本位出るそだと答えた。それ夫では一本の万年筆がどの位長く使えるだろうと聞いたら、此間横浜のもので、ペンはまだ可なりだが、軸じくが減つたから軸丈易えて呉だけかれと云つて持つて来たのがあるが、此人は十三年前に一本買つたぎりで、其一本を今日まで絶えず使用していたのだというから、是これがまあ一番長い例らしいと話した。して見ると普通の場合ではいくら残酷に使つても大抵六七年の保証は付けられるのが、一般の万年筆の運命らしい。一本で夫それほど程長く使えるものが日に百本も出ると云えば万年筆を需用する人の範囲は非常な勢もつとを以て広がりつつあると見ても満更まんざらけんとうちが見当違あきいの観察とも云われない様である。尤も多くの中には万年筆道樂という様な人があつて、一本を使い切らないうちに飽あきが来て、又新しいのを手に入れたり、之これを手に入れて少時しばらくすると、又種類の違つた別のものが欲しくなるといった風に、夫それから夫へと各種のペンや軸を試みて嬉しがる。そうだが、是は今の日本に沢たくさん山あり得る道樂とも思えない。西洋では煙管パイプに好みを有つて、大小長短色々取り交ぜた一組を綺麗きれいに暖炉だんろの上などに並べて愉快だんらうがる人がある。單に蒐しゆう集しゆう狂きょうという点から見れば、此煙管を飾る人も、盃さかずきを寄せる人も、瓢ひょう箪たんを溜め

る人も、皆同じ興味に駆られるので、同種類のもののうちで、素人しろうとに分らない様な微妙な差別を鋭敏に感じ分ける比較力の優秀を愛するに過ぎない。万年筆狂も性質から云えば、多少実用に近い点で、以上と区別の出来ない事もないが、強いて無くても済むものを五つも六つも取り揃えるのだから今挙げた種類の蒐集狂と大した変りのある筈はずがない。ただ其數に至つては、少なくとも目下の日本の状態では、西洋の煙管パイプ氣狂きちがいの十分の一も無かるうと思う。だから丸善で売れる一日に百本の万年筆の九十九本迄は、尋常の人間の必要に逼せまられて机上きじょうもじ若くはポツケット内に備え付ける実用品と見て差さしつかえ支さしつかえあるまい。して見ると、万年筆が輸入されてから今日迄に既に何年を経過したか分らないが、兎に角高価の割には大変需要の多いものになりつつあるのは争う可べからざる事実の様である。

万年筆の最上等になると一本で三百円もあるのがあるとかいう話である。丸善へ取り寄せてあるのでも既に六十五円とかいう高価なものがあるとか聞いた。固もとより一般の需要は十円内外の低廉ていれんな種類に限られているのだろうが、夫にしても、一つ一錢のペンや一本三錢の水筆に比べると何百倍という高価に当るのだから、それが日に百本も売れる以上は、我々の購買力が此の便利ではあるが贅沢品ぜいたくひんと認めなければならぬものを愛あい玩かんするに適當な位進んで来たのか、又は座右ざゆうに欠くべからざる必要品として価の廉不廉に拘わらず

重宝 ちようほう がられるのか何方かでなければならない。然し今其源因を一つに片付けるのは愚々の至として、又事実の許す如く、しばらく両方の因数が相合して此需要を引き起したとして、余はとくに余の見地から見て、後者の方に重きを置きたいのである。

自白すると余は万年筆に余り深い縁故もなければ、又人に講釈する程に精通していない素人 しろうと なのである。始めて万年筆を用い出してから僅か三四年にしかならないのでも親しみの薄い事は明らかに分る。尤も十二年前に洋行するとき親戚のものが餞別 せんべつ として一本呉れたが、夫はまだ使わぬうちに船のなかで器械体操の真似 まね をしてすぐ壊して仕舞つた。それから外国にいる間は常にペンを使つて事を足していたし、帰つてから原稿を書かなくてはならない境遇に置かれても、下手な字をペンでがしがし書いて済ましていた。それで三四年前になつて何故 なぜ 万年筆に改めようと急に思い立つたか、其理由は今一寸 ちよつと 思い出せないが、第一に便利という実際的な動機に支配されたのは事実に違ない。万年筆に就て何等の経験もない余は其時丸善からペリカンと称するのを二本買って帰つた。そうして夫をいまだに用いているのである。が、不幸にして余のペリカンに対する感想は甚だ宣しくなかつた。ペリカンは余の要求しないのに印気を無暗にぼたぼた原稿紙の上へ落したり、又是非墨色を出して貰わなければ済まない時、頑として要求を拒絶したり、随分持主を虐待

した。尤も持主たる余の方でもペリカンを厚遇しなかつたかも知れない。無精な余は印気がなくなると、勝手次第に机の上にある何んな印氣でも構わずにペリカンの腹の中へ注ぎ込んだ。又ブリュー・ブラックの性來嫌な余は、わざわざセピヤ色の墨を買つて来て、遠慮なくペリカンの口を割つて呑ました。其上無経験な余は如何にペリカンを取り扱うべきかを解しなかつた。現にペリカンが如何に出渉つても、余は未だかつて彼を洗濯した試がなかつた。夫でペリカンの方でも半ば余に愛想を尽かし、余の方でも半ばペリカンを見限つて、此正月「彼岸過迄」を筆するときは又一と時代退歩して、ペンとそうしてペン軸の旧弊な昔に逆戻りをした。其時余は始めて離別した第一の細君を後から懷かしく思う如く、一旦見棄たペリカンに未練の残つてゐる事を発見したのである。唯のペンを用い出した余は、印氣の切れる度毎に墨壺のなかへ筆を浸して新たに書き始める煩わしさに堪えなかつた。幸にして余の原稿が夫程の手数が省けたとて早く出来上る性質のものでもなし、又ペンにすれば余の好むセピヤ色で自由に原稿紙を彩り得る事が出来るので、まあ「彼岸過迄」の完結迄はペンで押し通す積でいたが、其決心の底には何うしても多少の負惜しみが籠つていた様である。

余の如く機械的の便利には夫程重きを置く必要のない原稿ばかり書いているものです

ら、又買い損なつたか、使い損なつたため、万年筆には多少手古擦つててこずつているもので、愈いよいよ万年筆を全廃するとなると此位の不便を感じる所をもつて見ると、其他の人が価のいかんに拘かかわらず、毛筆を棄てペンを棄てて此方こちらに向うのは向う必要があるからで、財力ある貴公子や道楽息子の玩具に都合のいい贅沢ぜいたくひん品だから売れるのではあるまい。

万年筆の丸善に於ける需要をそう解釈した余は、各種の万年筆の比較研究やら、一々の利害得失やらに就てつい一言の意見を述べる事の出来ないのを大いに時勢後れの如くに恥じた。
 酒呑のみが酒を解する如く、筆を執る人が万年筆を解しなければ済まない時期が来るのはもう遠い事ではなかろうと思う。ペリカン丈の経験で万年筆は駄目だけだという僕が人から笑われるのも間もない事とすれば、僕も笑われない為に、少しは外の万年筆も試してみる必要があるだろう。現に此原稿は魯庵君が使つて見ろといつてわざわざ贈つて呉れたオノトで書いたのであるが、大変心持よくすらすら書けて愉快であつた。ペリカンを追い出した余は其姉妹に当るオノトを新らしく迎え入れて、それで万年筆に對して幾分か罪つみほろぼしをした積つもりなのである。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

※吉田精一による底本の「解説」によれば、発表年月は、1912（明治45）年6月30日。

入力・Nana ohbe

校正・米田進

2002年5月10日作成

2005年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作成されました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

余と万年筆

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>